

SHOW-HOUSEシネマフルーツ

★★★★★

天国の日々 4K

1978年／アメリカ映画

配給：アンプラグド／94分

2025（令和7）年4月12日鑑賞

テアトル梅田

Data

2025-41

監督・脚本：テレンス・マリック

音楽：エンニオ・モリコーネ

撮影監督：ネストール・アルメンド

ロス

出演：リチャード・ギア／ブルッ

ク・アダムス／リンダ・マン

ズ／サム・シェパード／ロバ

ート・J・ウイクリル／スチュ

アート・マーゴリン

みどころ

“寡作の名匠” テレンス・マリック監督の名を世界的に轟かせた“最も美しい映画”と称される1978年の名作を4K版で初鑑賞！

全編をマジックアワー（魔法の時間）の20分間のみで撮影した本作は、まさに絵画のように光を美しく捉え、唯一無二の雰囲気を放っているが、緑内障や網膜色素変性症に悩む老人には、その暗さは正直言って少ししんどい。

また、タイトルとは裏腹の、三角関係（？）を含むドロドロしたストーリー展開も、ナレーションの多様ぶりがハナにつくため、私にはやっぱりテレンス・マリック監督は少し苦手・・・。

■テレンス・マリック監督の“唯一無二の名作”を初鑑賞■

私がテレンス・マリック監督の名前を初めて知ったのは、『シン・レッド・ライン』（98年）を観た時。その後に観た『ニュー・ワールド』（05年）（『シネマ10』331頁）で、初めて彼の作品の評論を書いたが、そこで私は次のように書いた。すなわち、

この映画を監督・脚本したテレンス・マリックは、大監督ながら製作映画が少ないことで有名な人物・・・？もっとも、はるか昔の『地獄の逃壁行』（73年）、『天国の日々』（78年）を私は両方とも全く知らない。また、20年間の沈黙を破って1998年に発表した『シン・レッド・ライン』は、ベルリン国際映画祭金熊賞を受賞したが、私はそれほどすばらしい映画とは思えず、むしろ『プライベート・ライアン』（98年）の方に感銘を受けた。『シン・レッド・ライン』の印象とパンフレットを読んで浮かび上がったテレンス・マリック監督の人物像は、映画界の習慣におもねず、あくまで「オレ流」を貫くタイプらしいということ。それは、『キネマ旬報』5月上旬号の特集で取りあげている『ニュー・ワールド』の中の、「テレンス・マリック映画歴」を

読んでも明らかなところだ。

彼は「寡作の名匠」と呼ばれているが、私の評論では、『名もなき生涯』(19年) (『シネマ46』82頁) は星5つだったが、『聖杯たちの騎士』(15年) (『シネマ39』未掲載) は星3つ、『ソング・トゥ・ソング』(17年) (『シネマ48』未掲載) は星2つだった。しかし、「テレンス・マリックの名を世界的に轟かせた“最も美しい映画”的”の一つであり、「絵画のように光を美しくとらえ、唯一無二の雰囲気を放つ」本作が、テレンス・マリック監督の監修により4Kレストア版で蘇るとなれば、こりや必見！

ちなみに、4月13日からは1970年の大阪万博から45年ぶりに大阪・関西万博が始まったが、1978年に公開された本作が4Kリストラ版で蘇るのは47年ぶりだから、その意味でも本作は必見！しかも、本作は映画音楽家のエンニオ・モリコーネにとって最も愛着のある外国映画であり、リチャード・ギアの初主演作だ。

■ロ■マジックアワー(魔法の時間)の撮影に注目！室内撮影も■ロ■

本作のチラシの表には、テキサスの広大な麦畑に建つ建物と、そこで働く人々の姿が映っているが、マジックアワー(魔法の時間)で撮影されたその風景は独特的の色彩を放っている。他方、チラシの裏面は麦畑に座るビル(リチャード・ギア)とその恋人のアビー(ブルック・アダムス)の顔がはっきりわかる明るさだが、全編にわたって1日の撮影時間がわずか20分間のマジックアワー(魔法の時間)の時間帯のみで撮影された本作は、まさに「フェルメールの絵画のように”光を美しく捉えた映画史上に燐然と輝く名作”だ。

『映画検定・公式テキストブック』(2006年・キネマ旬報社)は、「第4章 映画の用語集」で「マジックアワー」について、次のとおり解説している。すなわち、

照明のレベルが劇的にしかもすばやく変わる日の出直後、日の入り直前の時間帯をさす。カメラマン=監督のジャック・カーディフは自伝『マジックアワー』で、「ぴつたりの瞬間を掴むことができれば、消え入る寸前の陽光によって露出不足になり、目が醒めるような深い青に見える映像が得られる。まさにマジックだ」と解説している。

そんな「マジックアワー」をタイトルにした映画『ザ・マジックアワー』(08年) (『シネマ20』342頁)を監督したのが三谷幸喜だが、同作では「マジックアワー」の意味を、「誰にでもある『人生で最も輝く瞬間』と転じて使っているから、すごい。同作の面白さは、中国でもあまねく知れ渡ったようで、同作の中国版としてリメイクされた映画が『トウ・クール・トウ・キル』(22年) (『シネマ52』260頁、『シネマ54』231頁)だ。同作の最終興行収入は約533億8,000万円を記録し、『YOLO 百元の恋』(24年) (『シネマ56』147頁)に抜かれるまで日本映画をリメイクした中国映画の最高興行収入記録だったそうだ。

「マジックアワー」とは、映画の撮影にとってそれほど大切な20分間であり、人間にとて人生で最も輝く瞬間だから、その大切さをしっかりとかみしめる必要がある。

■□■映像の美しさは認めるものの、私の目には・・・■□■

本作は、少女リンダ（リンダ・マンズ）のナレーションから物語が始まっていく。リンダはシカゴの石炭工場で現場監督を殴ってトラブルを起こした青年ビル（リチャード・ギア）の妹だ。リンダは兄のビルとその恋人のアビー（ブルック・アダムス）と共に逃げるよう汽車に飛び乗り、テキサスの広大な麦畑に流れ着くが、その情景はすべてマジックアワーの時間帯で撮影したものだから、その映像の美しさは本当に一枚一枚の絵画を見るのと同じだ。

もっとも、近時、視力の衰えを感じるとともに、緑内障や網膜色素変性症の症状に悩まされている私には、本作のマジックアワーの“暗さ”は少し厄介！ちなみに、私は塚本晋也監督の『ほかげ』（23年）（『シネマ55』180頁）の評論で、次のように書いた。すなわち、

私は十数年前に白内障の手術を受けた後はよく見えるようになったが、さすがに来年75歳を迎える年になると、動体視力はもちろん、視野や明るさの面でも劣化が進んでいる。そのこともあって、私には本作のスクリーンの暗さが目立ってしまう。もちろん、これは塚本監督の意図的なもので、婁輝（ロウ・イエ）監督の「スパイもの」の名作『パープル・バタフライ』（03年）（『シネマ17』220頁）や『サタデー・フィクション』（19年）（『シネマ53』274頁）等と同じだが、さすがに始めから終わりまでこの暗いトーンが続くと、しんどい。

そのため、本作最大の売りであるマジックアワーの撮影にケチをつけるつもりはないが、本作でも画面の暗さが私には少ししんどかったことを告白せざるを得ない。

■□■多用される、少女リンダによるナレーションの是非は？■□■

他方、テレンス・マリック監督作品たる『ニュー・ワールド』の評論で、私は、「ちょっと鼻につくナレーションの多様ぶり・・・」の小見出しで、次のように書いた。すなわち、

『シン・レッド・ライン』でも少し鼻についていたが、この映画でも多用されているのがナレーション。とりわけ、前半部分の孤独な状態にあるジョン・スミスの心理描写と、ジョン・スミスが死亡（？）した後、ジョン・ロルフからのアプローチに悩むポカホンタスの生き方や心理描写にそれが多用される。もちろんそれは、スクリーン上の俳優たちの動きと完全に一致させているので不自然さはないのだが、あまりそれが多くなると、ストーリーはよくわかるものの、現場感・臨場感が乏しくなってくるし、俳優たちの演技の腕の見せどころも少し薄れてくる感じ・・・。コリン・ファレルの実力は既に十分わかっているからそれでもいいが、せっかく採り当てた宝石のようなネイティブ・アメリカンの女優の実力を遺憾なく發揮させるためには、ナレーションとして彼女に語らせるのではなく、もっとナマのセリフとして表現させた方が良かったのでは・・・？

しかし、それは本作でも同じで、多用される、少女リンダによるナレーションの是非は？ビルが孤独に暮らす裕福な地主のチャック（サム・シェパード）の下で麦刈りの仕事に就くについて、「働きやすいから」という理由で「ビルとアビーは兄妹だ」と偽ったのは理解できるものの、その後の三角関係（？）じみたトラブルを中心とするメインストーリーについて、妹リンダのナレーションを多用して“解説する”のは如何なもの・・・？私はそう思ってしまったが・・・。

■□タイトルとは裏腹のストーリー展開に注目！■□

本作の邦題は、原題の『Day of Heaven』をそのまま翻訳したものだ。テレンス・マリック監督が、「マジックアワー」の時間帯でのみ撮影した、「絵画のように光を美しくとらえ、唯一無二の雰囲気を放つ名作」にはそのタイトルがぴったりだが、アビーに恋心を抱いている病に侵されたチャックの余命が1年と告げられる会話をビルが立ち聞きしたところから、ストーリーは三角関係（？）を含めた生々しいものになっていくので、それに注目！本作中盤からそんなストーリー展開になっていく本作のタイトルが、なぜ『天国の日々』なの？本作のパンフレットには、撮影監督ネストール・アルメンドロスの「撮影について」と題する詳しい解説があるので、これは必読だが、その他にも

- ① 大森さわこ氏（映画評論家・ジャーナリスト）の「純粹さを求める唯一無二の異才、テレンス・マリックの永遠の傑作」
- ② 渡部幻氏（映画評論）の「20世紀前半のテキサス少女が物語る“持つ者”と“持たざる者”のメルヘン
- ③ 江守功也氏（映画音楽ライター）の「マジックアワーに聴くモリコーネの詩情」があるので、これらのコラムも必読だ。

私は、『エデンの東』（55年）で彗星のごとくデビューしたジェームズ・ディーンが大好きだし、彼が主演したその後の『理由なき反抗』（55年）も『ジャイアンツ』（56年）も大好き。それはあの年頃の繊細な心を持った青年の悩みを、彼が全身で表現していたためだ。それは、本作も同じで、本作がデビュー作となったリチャード・ギアは、20世紀初頭のアメリカという大舞台の中で、経済的な格差をどうしても埋めることができない青年ビル役を好演している。しかし、そんな青年ビルが妹のリンダと恋人のアビーを守りながら生きていくために、愚かな選択をしてしまうストーリーを描いた本作は、「天国の日々」が長く続かず、一瞬で天国が崩壊していく姿を、絵画的ともいえる美しい映像で描いた映画だということに気づく必要がある。『エデンの東』のラストでジェームス・ディーン扮する主人公ギャルが、エデンの東の「ノドの地」にあるはずの楽園を発見できたのか否かを考えるとともに、本作では「天国の日々」というタイトルとは裏腹のドロドロしたストーリーの中に、テレンス・マリック監督が込めた思いをしっかりと考えたい。

2025（令和7）年4月16日記